



おもちゃ電車 たま駅長がお出迎え



たま駅長

写真を見ておわかりのとおり、本物の電車なのだ。それもイベント用の特別仕立てではなく、普段の通勤・通学用に走っている電車である。四十年前の古い車両を改装したのだが、ここには町や企業が元気になるノウハウがぎっしり詰まっている。

住民の熱意が存続へ！

おもちゃ電車が走っている貴志川線は、もともと南海電鉄が経営していた。JR和歌山駅から和歌山市のお隣貴志川（現・紀の川市）までの全長十四・三キロメートルのローカル線。九十年以上の歴史を持つが、全国のほとんどのローカル線と同じように、赤字路線だった。そして南海電鉄は撤退の方針を決めた。多くのローカル線はそうのように消えてゆく。だが貴志川線は違った運命をたどった。

まず地元住民が存続運動を始めた。その熱意に応え、県と地元自治体が、代わって経営してくれる。

る。

この前代未聞、空前にして絶後のアイデアは、はじめ若い女性から、そして隣りにあつゆる階層の人から圧倒的な支持を受ける。たま駅長は一躍人気者になった。

もっとも人気者は忙しい。乗客一人一人へのご挨拶にただいま少々お疲れみだとか。でもご安心を。その辺は助役のミーコとちびがしっかりサポートしている。ちなみに猫である。

夢のある電車と！

貴志川線の最新の挑戦が、おもちゃ電車だ。

いきさつはこうだ。和歌山電鉄の営業マンが、ラッピング広告（バスや電車の車体に広告を入れる、今流行のアレです）の提案に企業回りをしていた。

ある日彼はおもちゃをネット販売している県内の会社に向かった。広告を出してもらえる手応えがあった。予想以上の……

そのデザイナーの提案はこうだ。「ラッピングではありふれてい

事業者を公募。九社の中から選ばれた企業が、新しく和歌山電鉄（株）を設立し、昨年、新生わかやま電鉄貴志川線がスタートした。

ということ。貴志川線は、地元住民・経済界・行政の熱いエールのもと出発進行する。矢張り早に利用促進の企画も打ち出した。

いちご電車。たま駅長

貴志川線祭り、一口千円の市民サポーター募集、無人駅だった終点にネコの駅長、歌声電車・結婚式電車・会議電車・そして「いちご電車」の運行……

もともと貴志川という町はいちごで有名だったのだが、「いちご電車」と聞いて、人々は耳を疑った。「一体何なんだ??」

真っ白に塗られた車体に赤いいちごのマーク。内装も座席からつり革に至るまで、見たことのない電車がそこにあった。四十年間走り続けて、すっかり古びてしまったあの車体がエレガントに、可憐に生まれ変わるとは！

そしてアイデアはまだまだ続く。何と、終点の貴志駅に、メスの三毛猫「たま」が駅長に就任したのだ。人々はまたしても「??」に陥

る、お金をかけてでも何か夢のあるものを作ってはどうか。外観だけでなく、電車の内装もすべて、おもちゃで埋めつくす。



いちご電車



天然木を使用した内装。プラモデルやフィギュアのショーケース。ベビーベッドまである。もちろんグッズの売店だってある。

わかやま電鉄貴志川線。

ここには夢がある。電車を知り尽くし、楽しいことが大好きな人たちの夢がある。夢のあるところに人々は集まる。

ほら、今日も街と田園地帯をつないで貴志川線が走っている。ほら、そこには乗客たちの笑顔が……

